
魔女と忍者と旅商人

牧村沙夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と忍者と旅商人

【Nコード】

N5744Z

【作者名】

牧村沙夜

【あらすじ】

長い長い戦争が終結した世界。

元忍者の少年イリヤは自分の存在意義を失い、義妹のドミニカに甘えっぱなしの怠惰な毎日を送っていた。そんな彼はある日、魔女と名乗る謎の少女と出会うが――。

プロローグ

それは泡沫の夢である。

薄暮の空。

山の麓に目を凝らすと見える、あちこちに火の手が上がった故郷の里。

一人の少年が蹲っている道の近くでは、少年も見慣れた馬車が横転し、あちこちで動かなくなった骸が転がっている。

そしてその少年の腕の中では、その身を血で真っ赤に染めた少女が薄く息を継いでいた。

少し雨が降っているのか、出血による貧血で真っ青になった少女の頬にポタ、ポタ、と水滴が落ちる。ふと空を見ると――何故か霞が掛かっている。

少女の呼吸は浅く、身体も冷たい。間もなく死ぬだろう。あの子がここに辿り着くまで保つかどうか。少年の研ぎ澄まされた直感は、冷静にそう告げていた。

なのに、どうして息が詰まるのだろうか。どうして唇が震えて止まらないのだろうか。

少年は血染めの少女にどんな声を掛けるべきなのかも判らず、震えが止まらない唇を噛み締めた。

「……ないて、いるの……？」

少年の姿を認めた少女は、虚ろな目で微笑んだ。

「……………あ……………」

少女にそう指摘されるまで、少年は自分が泣いているという事に気が付かなかった。

幼い頃から、周囲の安全が確認されるまでどんな状況でも感情を押し殺すようにと叩き込まれたはずなのに。

いや、自分はもうとっくにそんな感情は捨てたはず。

ならば、どうして自分は泣いているのか――。

「……あの子の、ことは、おねがいね……」

「……ああ」

少女は息も絶え絶えに、今にも消え入りそうな声で囁いた。

何と答えていいのか分からない。

少年は何時の間にか噎れ果てていた喉を振り絞り、掠れた声を出して頷いた。

それを見た少女は、何か愁いを帯びたような笑みを浮かべた。

「……さいごに、ひとつだけ、おねがいして、いい……？」

少年は少女の声を聞きながら、彼女の身体から生命力とでも表現すべきものが、急速に抜け落ちていくのを感じていた。

限界は近い。

そのことは、少女もなんとなく分かっているのだろう。

少年は嗚咽を堪えながら、小さく一度だけ頷いた。

ああ、やってやる。

たとえ、あの子が独り立ち出来るようになったら後を追って死んでくれと言われても、少年はそれを引き受ける覚悟を決めた。

「……わたし、を……」

瞳の焦点が定まらなくなっていく。全身の力がみるみる抜けていく。

こんな状況で声を出すのは、相当な体力の消費を伴うだろう。

つまり少女は最期の時を早めてでも、自分に頼みたいことがあるのだ。

だったら絶対に叶えてやる。叶えてみせる。

しかしその言葉は、少年が全く予想していないものだった。

「……――……」

少年は絶句した。

そんな事、当たり前ではないか。

それとも君は、俺がそんな事も出来ない人間だと思っているのか――？

少年は胸の内から次々に溢れ出てくる疑問を棚上げし、心に生じた動揺を必死に押し殺して頷いた。

「――ああ。分かった……」

それを聞いた少女は、満足した表情を浮かべて目をゆっくりと閉じた。

そしてそのまま、眠るように息を引き取った。

第一話「ちゃんと働かないと」

「……………か」

ほとんど声としての形を成していない、吐息のような呟きが漏れ出した。

呟いた後で、黒髪の少年――イリヤは、いつものようにその言葉の意味を考えようとしたが、その行為を続けるのは非常に困難だった。

なぜなら、その言葉に答えがあるとは思えなかったからだ。

少年は長い夢を見ていた。

これは一種の悪夢とでも言うべきものだが、別にイリヤの妄想という訳ではない。

この夢の内容は、およそ一年前にイリヤが経験した惨劇をそのまま再現したものである。誇張の類は一切無い。

その時の鮮烈な記憶と、少女が最期に発した言葉の謎が今もなおイリヤの心を蝕み、それが時々夢という形になって現れているのである。

そして古びたベッドから起き上がり、夢の中の「あの子」がいつものように朝早くから何処かへ出掛けていることを確認すると、身に纏った黒いベストの埃を払い、台所へ行って昨日の夕飯の残りである冷たい山菜スープに黒パンを漬して食べながら、朝日に照らされて赤く染まっただけの街を眺めた。

この大陸全土でおよそ200年前から続いていた大陸戦争は、常にその渦中であつた北方の大国であるセント帝国の崩壊と、その帝国を打ち果たした有力な国家間での和平条約によって終わりを迎えた。

各国は長きに渡る戦乱によって疲弊しきつた国土や経済の回復に

追われ、なおも戦争を続けようとする国は一つも無かった。

いわゆる平和な時代の到来である。

だが、一つの時代の移り変わりというものは、全ての人間にとって明確な区切りがあるわけではない。

ある日偉い人に『戦争は終わりました』と告げられたからといって、全てが翌日から新しいものへと切り替わる訳にはいかないのである。

むしろあまりに長く続いた戦乱は、本来異質な行為であるはずの戦争を日常化させ、平和な時代の訪れを素直に受け入れられない者達を数多く生み出してしまうという皮肉な状況を作り出してしまった。

例えば代々軍需物資の生産を続けて生活してきた武器職人だったり。

例えば代々駐屯する兵士を相手に商売をしてきた軍事商人だったり。

あるいはこの少年のように、生まれた瞬間から戦乱の最中でこそ、その力を十全に発揮出来るように「作られた」者だったり。

戦争がいつまでも続くことを前提に生活基盤を築き上げてしまった者達。

それは少し前なら誰かに必要とされ、それに誰よりも応えることが出来る存在だったが、平和な時代とあっては無用の長物でしかなかった。

料理の際に求められる刃物は、剣ではなく包丁であるように。

だがそれが分かって、生まれた時から続けていた生き方を変えるのは容易ではない。

それはもう彼らの血肉になってしまい、身体にも精神にも染みついてどうすることも出来ないものだからだ。

そう、言うなれば彼等は——『時代に捨てられた』のだ。

イリヤは今日も彼女の遺した言葉の真意を掴めないまま、朝の食

事を終えた。

そして持て余した時間を潰すため、荷物を纏めて家を後にした。

大陸東部に位置する地方都市ベラトリックス。

通称——？英雄の街？。

大陸戦争中、軍事拠点としての性質が強かったこの街は、住民が居なくなった空き家や廃屋には事欠かなかったため、他の国や地方から流れてきた難民がこれらの建物を修繕して住み着く事が日常茶飯事になっていた。

イリヤのような流れ者が街に住みつく事について、元々の住民はあまりいい顔をしないのだが、そういった人間を排斥しようという動きは今のところ起こっていない。

何故なら、ようやく訪れた平和な時代を何とか生きていこうと、庶民の間ではお互いの立場を越えた相互扶助的な意識が芽生え始めていたからだ。

今の世の中は、一言で言うなら戦後の混乱期だ。

各国の領主、貴族、騎士、一部の聖職者などの所領を持つ者達は、その統治体制の再編成に躍起になっており、庶民の生活にはほとんど手が回らない。

そのため庶民は、お互いに協力し合って明日の生活を守るべきである——そんな雰囲気は何処の街でも大なり小なり生まれていた。

少年の住処である廃屋も、この難民街の一角に建っている。

生まれ育った故郷を失ったイリヤは、「あの子」と共に数カ月間放浪生活を送った後、このベラトリックス市内に自然発生した難民街に流れ着いていた。

親や親戚は消息不明である。

一年前に起こった謎の集団の襲撃によって、一族郎党は「あの子」を除いて全員消息を絶ってしまったため、今では生きているのかも死んでいるのかも分からない。

まああの連中がそう簡単に死ぬとは思えないし、自分のように何

処かで適当に生きているだろう。ひょっとしたら、この街にも何人か居るかもしれない。

「……はあ」

イリヤが溜め息を吐きながら仏頂面で歩いているのは、その難民街の大通りだ。

人の姿が無ければ廃墟としか言い様の無い小汚いボロ屋の群れが、右にも左にも見渡す限り広がっている。

壁に亀裂が入っていたり、塗装が剥がれているのは序の口で、大穴の開いた壁がそのまま放置されていたり、油脂を塗り込んだ布で天井を代用しているような家がある。天候不良が命取りになりそうだが、その家の主にそんな余裕は無いのだろう。

ただし流れている空気は、廃墟のそれとは正反対だ。

お世辞にも上品とは言えないが――それだけに野生的とも言えるのだろうか、泥臭く活気に溢れた空気が辺りに満ちている。

路上のあちこちでは、木箱や布切れの上に『商品』と呼べるのかも怪しいガラクタや詳細不明の山菜や獣肉等の食料品を並べて売っている人達と、そこで買い物をしている人達で賑わっている。

いわゆる闇市だ。この辺りでは毎日開かれている。

「イリヤじゃないか」

道端に出した椅子に座って編み物をしていた老婆が、道を歩いてきたブルーに気付いて声を掛けてきた。名はエニフだったか。姓は覚えていない。「エニ婆」という呼称がこの辺りの人間に定着しているからだ。豊富な人生経験を活かして、この辺りの様々な問題を仕切っている世話好きのバーサンである。

「あんたは、また、そうやってブラブラしてるのかい？」

「そうかもな」

痛い所を突かれたイリヤは適当に答えた。それを聞いたエニ婆は、やや苛立った表情を浮かべて口を開いた。次の台詞は、大方予想がつく。

「あんたもドミニカちゃんみたいに、ちゃんと働かないと」

「——そうだな」

毎度毎度余計なお世話だと言いたい衝動を抑えて、イリヤは素直に肯定した。

彼は現在プータローである。

ついでに補足しておく、彼はたまたま解雇されてしまつて次の仕事が無いという訳でもなければ、新たな職に就く為の努力をしている訳でもない。

厳密には街の職業派遣組合所に名前の登録くらいはしているのだが、未だに具体的な仕事をした事は一度も無かった。

強いて言うなら、時々義妹である「あの子」に頼まれるお使いくらいか。

改めて考えてみると、実にロクでもない義兄である。よく愛想を尽かされないものだ。

そんなイリヤであるから、こうやって小言を受けるのもまあ当然と言えば当然なのだった。もちろんそれを聞かされる身としては、堪ったものではないのだが。

「だいたいあんたは——」

「おい」

エニ婆が続けて何か言おうとしたところで、背後から知った声が聞こえた。助かったとばかりにそちらの方を向くと、「あの子」が立っていた。

「兄さん。おはよう」

華奢な体つきの少女だ。

小型の獣を思わせるような——活発で悪戯っぽい印象がある。

その四肢は細く、全体的に肉付きが薄い。もちろん不自然な痩せ方をしているわけではないのだが、見方によっては少年のような印象を受ける。幾分控えめな胸の膨らみと、栗色の短髪がそれを助長していた。色気の類はほとんど感じられない。

その眼はやや吊り気味だが、きついという感じではなく、どちら

かと言えば愛らしい子猫を連想させるような吊り眼である。

そしてその顔立ちは我が妹ながら——厳密には義妹だが——可愛い。それはイリヤも認めるところである。単純に異性に好かれるというよりも、少し年の離れた人に可愛がられる類の容貌である。

そんな彼女がイリヤの義妹——ドミニカだ。イリヤより三つ年下の十四歳である。

この闇市で物売りをして、不真面目な義兄との共同生活を支える健気な義妹である。こんな自分には勿体無いぐらいよく出来た奴だ。正直頭が上がらない。もつとも当の本人は、あまり気にしていないようだが。

「おはよう」

「悪いんだけど、いつものお使いを頼んでもいい？」

ドミニカは両手を合わせて頭を下げ、頼み事をする時のポーズを取った。

彼女に食わせて貰っているイリヤに、頼み事を断る道理は無い。そこまで行くともはや人間失格である。それに「彼女」からも、ドミニカの面倒を見るようにと頼まれている。働かないだけならまだしも、積極的に足を引っ張る訳にはいかなかった。

「——ああ。分かった」

まだ日が昇ったばかりだ。今から行けば、昼頃には帰って来られるだろう。

たまにはドミニカに美味しい物でも食べさせてやるべきだろうが——まあそれは無理な話だ。

「じゃ、行ってくるか」

イリヤはドミニカに手を振ると、踵を返して歩き始めた。

「……しかし、『働く』——か」

一旦家に戻って装備を整え、難民街を横切ってベラトリックスの街の南城門に向かったイリヤは、そこを警備している若い兵士を横目で見て、自嘲気味に笑った。

第二話「襲わないのか？」

「――面倒だな」

イリヤは太い枝を削り出して作った即席の杖を弄びながら溜め息を吐いた。

彼の周囲には荘厳な大樹が無数に生えており、さらに深緑の苔がそれらの大樹を含めて全てを覆い尽くしている風景が広がっていた。大樹の葉で日光の大部分は遮断され、そろそろ昼前の時間だということに、まるでまだ早朝であるかのように暗く涼しい。

ベラトリックス市は、いわゆる一般的な城塞都市だ。

この街は元々小さな盆地だった土地を切り開いて建設された、攻めにくく守りやすい要害の地である。その分、交通の便そのものあまり良くないのだが、東西南北の大都市とも距離自体は近い要所の地である。長く続いた戦乱は、こうした軍事的機能を備えた都市をいくつも誕生させる契機になったのだった。

そんな訳で、ベラトリックス市の周辺には緩やかな丘陵地帯と、それを取り巻く広大な樹海が広がっている。

特にこの樹海は動植物の実りが非常に豊かなのだが、一步道を間違えれば自分が何処を歩いているのか分からなくなる魔性の地である。まあ最初からそれを見越して建設されたのだろうが――ともかく樹海に入って遭難する人間は後を絶たない。そういう訳で、猟師や樵夫といった一部の専門職を除けば立ち入る者は殆どいないのだった。

ドミニカの「お使い」とは、そんな場所で彼女が闇市で売る商品を調達する事である。

主な獲物は季節毎の山菜・薬草で、後は運次第でノウサギ等の食用動物である。

幼い頃から一種の兵器として「作られた」イリヤにとって、このような場所を迷わず歩く事は朝飯前も同然であり、食用・薬用関係

に限れば動植物の造詣も深かった。そのためこの街に住居を構えて以降、暇を持て余して外でブラブラしていたイリヤを見かねたドミニカが、半ば強引に頼んできたのがこの「お使い」の始まりだった。なんでもドミニカの話によると、闇市の物売り程度では買い叩かれる事が多いため、自力で商品を手に入れる手段が無いと収支が釣り合わないだとか言う話だそうで、その後色々反論してみたものの、結局上手く言い包められてしまったため、こうして不定期に「お使い」を命じられているのである。

流石に根っからの商売人——交渉術はお手の物か、と適当に考えながらイリヤは樹海を奥へ奥へと進んで行く。

しかし魔性の地と呼ばれるだけあり、いくら歩いても似たような風景が続いている。専門の訓練を受けていない者はその単調な風景に幻惑され、何時の間にか前後左右が分からなくなってしまうらしいが、何度もここに入っているイリヤの頭の中には、既に樹海の大まかな地図が出来ていた。

「ま、しょうがないよな。あいつも、他に頼れる奴がいらないんだし」考えてみればドミニカのような普通の少女——勿論最低限の護身術は学んでいるだろうが——にとって、いざという時に自分を守ってくれる存在は非常に重要である。特に治安の悪い今の時代では尚更だ。だからドミニカは自分がこんな風であっても許してくれているのかもしれないし、自分もそれに甘えているのかもしれない。

そんな事を考えながら歩いていると……

「——ん？」

イリヤは足を止めた。

何か妙な音が彼の聴覚に引っ掛かったからだ。

「……」

咄嗟に手近な大樹の陰に隠れて耳を澄ませると——やはり、がさがさと落ち葉を踏み締める音が聞こえる。しかもその音は、イリヤの方に向かって移動しているようだ。

「……獣、だろうな」

音の大きさから推測するに、どうも小動物の類ではなさそうである。それにしてもあまりに音が大きい。距離は20、いや15メートルといった所か。樹海の中はそこまで足場が良い訳ではないが――大抵の獣は一瞬で走り抜けてしまいう距離である。

イリヤは猟刀に手を掛けた。

シカやオオカミの類なら狩る事も検討するべきだろうし、クマやオオカミなら上手く逃げるなりやり過ぎすなり、何らかの算段を立てなければならぬ。

万が一にも大型魔獣の類ならば――最悪の事態も覚悟しなければならぬ。

(……ま、その時はその時だ)

イリヤは肚を括り、更に耳を澄ますと――

「――わぎゃっ!？」

べしや、と何かが地面に倒れ伏す音と共に、短い悲鳴が聞こえてきた。おそらく人間か獣人の類が――何かに足を引っ掛けて転んだ音だ。

「……………」

意外な形で機先を制されたイリヤは、大樹の陰で僅かに溜め息を漏らした。なんと言うべきか、張り詰めていた気が一瞬で抜けてしまった感じである。

勿論、相手の正体がある程度判明したと言っても自分の正体を不用意にさらけ出す程、イリヤは愚かではない。相手は山賊や追い剥ぎの類なのかもしれないし、この拍子抜けな行動も全て計算づくなのかもしれない。もしもそうなら相手は心理戦に長けたかなりの手練れであり、自分がここに隠れている事も気付かれている可能性が高い。

しばらくは探り合いになるか――そう気合いを入れ直すイリヤを嘲笑うかの様に、足音の主はどんどんイリヤの下に近付いてくる。

(ちっ、自信アリって事か――)

イリヤは杖を静かに置き、猟刀を抜いた。軍用ではなく狩猟用の

ため、正直頼りないと言えば頼りないのだが、他にまともな武器が無い。

そして足音の主は大樹の反対側に辿り着き、その樹を回り込もうとして――右手で獵刀を構えたイリヤとぼっちり目を合わせ、驚愕の表情を浮かべて凍り付いた。

「……あ？」

足音の主と目を合わせたイリヤは、思わず足音の主を見つめた。

本来臨戦態勢時のイリヤにはあり得ない事だったが、そのくらい足音の主の正体が彼の予想外な存在だったからだ。

一言で言えばそれは――人間の少女である。

年齢は16・7といったところか。

例えるなら鴉のような、不吉さと神聖さを併せ持つ妖艶な顔立ちだ。

薄暗い樹海の中で、長い黒髪が微かな木漏れ日を受けて艶やかに靡いている。

大きな蒼い瞳を見開いて怯えている様子は、普通の少女のそれと変わらない。

兎にも角にも山賊や追い剥ぎの類ではないだろう。

それどころかそんな少女に向かって獵刀を突き付けているイリヤの方が、どう見てもそちらの種類の人間である。

こんな少女が一人で樹海の中を彷徨っているのも奇妙な話だが、その格好もまた奇妙であった。黒ローブに大リュック、というだけならそれほど不思議でもないのだが、何故か非常に複雑な造りの杖を持っている。素材は鋼だろうか。その長さは少女の肩くらいなのだが、どうやら中折れ式になっている様で、実際はその倍以上の長さがありそうだ。武器としても杖としても中途半端なその杖は、少女の手の中で鈍い光沢を放っている。

「……っと、悪いな」

イリヤは獵刀を鞘に戻した。流石に獵刀を構えたままでは、少女

もまともに会話し辛いだろうと判断したからだ。

「こんな所で一体、——ッ!？」

何をしているんだ、と質問しようとしたイリヤに向かって、少女はその杖をいきなり横薙ぎに振るった。

その攻撃にイリヤが反応出来たのは、その奇妙な杖に注目していたからだった。

僅かに弧を描き、脇腹目掛けて鋼の杖が走る。

杖の重量から推測するに、下手な防御はかえって命取りである。

イリヤは大地を蹴り、後ろに跳んだ。

そして彼が一瞬前に立っていた空間を、少女の振るった鋼の杖が切り裂いた。

「——ちっ、仕方ない」

イリヤは後ろに滑りながら再び右手で獵刀を抜いた。そっちがその気なら遠慮はしない。とはいえ、あの距離から不意打ちして掠りもしない程度の技量なら、万が一にも遅れを取る事はないだろう。後は適当に杖を奪って戦意を挫けば——

がさがさっ。

「あ」

「……………」

イリヤが足元を見ると、その一瞬前に躲したはずの杖が足元に転がって来た。投げてきたとは思えない。という事はすっぽ抜けたのだろうか。確かに無闇に重たい物を振り回せばそうなるのかもしれないが、果たしてそんな馬鹿な奴がいるのか——?

イリヤは不思議に思いながら少女の杖を拾い上げた。

こうして間近で見ると、ますます奇怪な杖である。

だが、その重量は見た目以上に——まあそれでもそこそこあるが——軽い。4・5キログラムといったところか。中が空洞になっているのであろう。ともかく、剣や槍の類ともある程度打ち合えそう

な鋼の杖としか言い様がない。複雑な紋章があちこち刻まれている事を考慮すると、儀礼用の杖なのかもしれない。しかしその事實は、少女の臂力が人並みであることを示している。これでは流石に勝負アリだろう。

少女も自分に勝機が無くなった事を理解したのか、絶望の表情を浮かべて突っ立っている。いくらなんでも怯え過ぎだろうと思ったが――まあ出会い方が悪過ぎたか。木陰に忍ぶ謎の獵刀男にしか見えなかっただろうし。

「いきなり何なんだ、一体」

イリヤは再び獵刀を鞘に納め、両手でその杖を持ちながら呆れる様に言った。

「……か、返せ」

イリヤに敵意が無さそうだと判断したのか、それともまた不意打ちしようかと企んでいるのかはいまいち判断出来ないが、少女は僅かに声を振るわせながら言った。

まったく、ここまでもって戦意を挫かれる相手は久し振りである。

「もう殴りかかってこなければな」

イリヤは溜め息を漏らした。それでもダメなら無視して逃げるしかないが――それもなんだか釈然としないなあというのが率直な気持ちである。

「し、しない。しないから」

どうもこの少女の言動には自分を構成しているものを揺さぶる何かがある。居たたまれなくなったイリヤは少女の下まで歩み寄ると、その杖を手渡した。

「ほら」

杖を受け取った少女は、まさかイリヤが正直に返してくるとは思っていなかったのか、その蒼く澄んだ瞳を丸くして訝しがるように首を傾げた。

「お、襲わない――のか？」

「別にそうしても構わないんだが、そんな事をしたら五月蠅い奴が

いてな」

勿論その「五月蠅い奴」とはドミニカだ。

彼女は商売人の割には——むしろ商売人だからなのかもしれないが——潔癖症で、以前樹海の奥で見つけた死体から金目の物を奪った時も、しつこく追及されたものである。

それにイリヤ自身も、それこそ命の危機を感じない限りは、年頃の少女に手荒い真似はしたくないというのが本音である。もっともその理由は、騎士道精神からだとかそういう前向きなものではなく、単純にそういった行為は自分の心的外傷^{トラウマ}を決るからという後ろ向きなものなのだが。

しかしこの少女も、相手がそんなイリヤだったから良かったものの、運が悪ければ身包み剥がされて殺されていた可能性もあったのである。そういう意味では、少女の不意討ちは当然の選択とも言える訳で、それを警戒していなかったのはある意味イリヤの失策である。

少女はイリヤの方をチラチラ見て警戒しつつ、その杖の機構が壊れていないかどうかを確かめるように、杖のあちこちを触りながら言った。

「ふむ。ということは——獵師か？」

獵師か。実際、職業的な獵師を名乗れる程の技量を持っている訳ではないのだが、正直に日頃は無職ですが時々義妹に頼まれて狩りをしています、なんて言っても話が余計に拗れるだけだろう。

そう判断したイリヤは、とりあえず肯定しておく事にした。

「ま、そんなところだ。あんたは？」

「私は——旅の者だ」

第三話「私の名前は」(前書き)

今回はキリがいいので分量少なめです。

第三話「私の名前は」

「私は——旅の者だ」

「……………」

どうも嘘っぽい。

いくらベラトリックス市は四方を山で囲まれている城塞都市だといっても、当然樹海の一部を切り開き、丘陵の通り易い場所を整備して造られた街道の類は存在する。旅人なら普通に街道を歩けばいいし、その方が余程安全で早いのだ。

つまり余程の事情が無い限り、敢えてこの難所を越えてくる理由が無いのである。となると答えは罪人か、賞金首か。イリヤの頭にはそれくらいしか浮かばない。

もつとも、こんな調子の少女に何が出来るんだと思わないでもないのだが、例えば誰かに濡れ衣を着せられて、という事は十分に考えられるのだ。生き伸びるためには誰であろうと傷つけ、貶め、略奪する。今はそういう非情な時代なのである。

「ま、あんたが何者だろうが、俺には関係無いか」

「……信じていないな？」

勘は意外と鋭いらしい。下手に取り繕って、また少女の攻撃を警戒するのも面倒なので、ここは正直に答えるべきだろう。

「ん？ いや、こんな所を歩いている時点で、何か訳アリなんだろうと思っただけだ」

「ふむ。確かにその通りだが——お前に話す必要はない」

「別に聞く必要も無いだろう？」

「……それもそうだな」

見たところ、この少女の警戒はとりあえず解けたらしい。となればお昼過ぎまでにドミニカの所へ帰るためには、この正体不明の少女に関わっている余裕は無いのだが。

「お互いの誤解も晴れた所で、そろそろ——」

「ところでお前、獵師と言ったな？」

話を適当に切り上げ、さっさとその場を立ち去ろうとしたイリヤを、すっかり落ち着きを取り戻した少女が呼び止めた。しかし、今更イリヤに何の用があるというのだろうか。まさか道案内でも頼むつもりなのだろうか。

「……だったら何だ？」

「どうも道に迷ってしまったようだ。だから、近くの街――ベラトリックスと言ったか、そこまで案内してくれ」

予想的中である。しかしここまで来られたなら、後は適当に歩いているだけでも街が見えてくると思うのだが。

「いや、ここからは徒歩二時間ってとこだぞ？ 方向も大体合っていることだし、もう迷わないだろ」

「そうなのか？ 今日で三日も歩いている事を考えると、完全に道に迷ったと思っていたのだが、やはり私も捨てたものではないな」
少女は自分の力量に満足したような、なんとも不敵な笑みを浮かべて言った。

しかし少女の考えは、根本的に間違っていた。

この丘陵地帯を抜けるのに要する時間は、普通の人間なら一日半、イリヤならば半日もあれば十分である。つまりここまで来るのに三日も掛かっているという事は、この少女がこういう地形の歩き方を知らないという事実を表している。

この辺りまではとりあえず下って行けばいいだけなので、この少女もなんとか来る事が出来たのだろうが、ここから先は平坦な樹海が続いている為、このままでは非常に遭難する可能性が高い。

「ちょっと待て。こんな所を抜けるのに三日も掛かる訳無いだろ。やっぱりあんた、道に迷ってるぞ」

「本当か？ ふむ……困ったな。やっぱり道案内してくれないか？」

「それは別に構わないんだが、まだ仕事が終わってないんだよな。少しの間でいいから待っていてくれないか？」

それを聞いた少女は僅かに口を尖らせながら、自分は彼に何を言

うべきなのかと十秒ばかり考え、そして再び口を開いた。

「――多少の報酬は出す。今は早く街に着いて、ゆっくり休みたいからな」

「そうか。ん――」

前述の通り、彼は元々何か食い物を手に入れる為に樹海に入った訳ではなく、お金を稼ぐための商品を調達しに来ただけであるので、少女の提案を飲む事は必ずしもドミニカのお願いに反する訳ではないからだ。

「――だったらいいか。付いて来い」

色々考えた結果、結局今日の狩りは中止することにした。最悪の場合、明日また来ればいいだけの話だからだ。

「ああ。私の名前は……ん？」

取引が成立し、お互いに名前を名乗ろうとしたところで、少女は突如その顔を曇らせた。

「どうし……って伏せろ！」

「なわっ!？」

『それ』の接近に気付いたイリヤが少女を大樹の陰に押し倒してその上に覆い被さった瞬間だった。

大樹の反対側から放たれた火山弾のような炎の塊が、一瞬前までイリヤと少女が立っていた場所を通り過ぎていき、大樹に着弾してその周囲を炎上させた。

「くそっ……最悪だ……!」

それを見たイリヤは思わず唇を噛んだ。いくらなんでも相手が悪過ぎる。

「こっちだ! 来い!」

そして少女の手を強引に取ると、有無を言わず引っ張った。いちいち事情を説明している時間すら惜しいからだ。

「あ――、もう……!」

少女は戸惑いの声を上げながらも、イリヤに手を引かれるまま樹海を走り始めた。

このままじっとしていても間違いなく殺される。勿論逃げても殺される可能性は——極めて高いのだが。

「ちっ！」

黒く大きな影が、先程の炎弾で燃え上がる樹海の中を疾走してどんどん近付いてくる。

その魔手からなんとか逃れるべく、イリヤは少女の手を引きながら全速力で地を蹴るが、そんな彼に引かれる少女の足取りは明らかに重い。基本的な脚力が違うのは勿論だが、それに加えてこの大荷物では尚更である。イリヤはその状況を打開する為、少女の荷物に空いた方の手を伸ばした。

「おい、ちよっと!？」

「俺が持った方が速い! 貸せ！」

「むう——落とすなよ!？」

イリヤは少女の手を掴んでいない方の手で、彼女がこの状況下でも懸命に握っていた重い鋼の杖を奪い取ってさらに走ると、突然開けた場所に出た。

勿論樹海を抜けた訳ではない。

そこは切り立った崖だ。下には今抜けて来た場所と同じような樹海が広がっており、さらに遠くに視線を向ければ、僅かにベラトリックスの街が見える。

崖の高さはおよそ二十メートル。傾斜は70〜80度といったところだろうか。

「——ったく」

振り返ったイリヤの視界に飛び込んできたのは、巨大な蜥蜴だった。

もともと、燃え盛る樹海の中を悠々と駆け回り、額の奇怪な器官から次々に炎弾をあちこちに放つ馬のような大きさの赤黒い蜥蜴を、蜥蜴と呼んで良いのなら、だが。

「サラマンダーによりよって火蜥蜴かよ……!」

サラマンダー火蜥蜴。そう呼ばれる魔獣の一種だ。

世界中でおよそ数十種類が確認されている魔獣の中でも屈指の戦闘能力を誇り、基本的に雑食ではあるものの、大好物は焼いた獲物の肉という恐ろしい怪物である。

当然少人数で戦うのは愚の骨頂であり、それどころか一度狙われて無事に逃げ切れたら奇跡と言われるだけの異常な脚力と執念を兼ね備えている最悪の相手だ。

「おい、崖だぞ！ どうするつもりだ！？」

少女は遥か下に映る樹海を見て、焦燥からかイリヤの胸倉を掴んで叫び声を上げた。確かに、一見何処にも逃げ場は無い。普通に考えれば万事休すである。

「このまま下に飛び降りる！」

胸倉を掴まれたイリヤはそのまま左腕一本で少女を抱き抱えると、崖の淵に立った。

「ちょ——おい！？ どうやって！？」

「俺にしがみ付いてろ。途中で体勢さえ崩れなければ、傾斜に沿って降りられる」

それを聞いた少女は一瞬躊躇いの表情を浮かべたが、イリヤの背中越しに迫り来る火蜥蜴サラマンダーの姿を認めると、溜め息を吐いて彼の身体に四肢を絡み付けた。

「……分かった。途中で放り捨てるなよ」

「ああ。しっかり掴まってるよ！」

イリヤはそれだけ言うと、火蜥蜴サラマンダーの放った炎弾が彼の足元に着弾するまでの刹那の間に、その身を崖下へと滑らせた。

「~~~~~~~~ッ！？」

少女は急斜面を滑降するイリヤの身体に必死でしがみ付きながら、声にならない悲鳴を上げた。

第四話「では——始めるか」

それからおよそ一分後。

「……ふー。案外なんとかなるもんだな」

なんとか崖下への滑降に成功したイリヤは、上の様子を伺いながら呟いた。

「お前、滅茶苦茶だ……」

一方その脇で両手を地面に付けてぐったりしているのは、先程までイリヤにしがみ付いたまま悲鳴を上げていた少女だ。

「まあ、普通に逃げたくらいじゃ無理だろうと思ったからな」

イリヤが崖の滑降を成功させる際に取った行動は至ってシンプルだ。

崖の斜面の彼方此方に飛び出している、大樹の根や掴めそうな岩を瞬時の判断で掴んでは放し、掴んでは放し、自らの落下速度を限りなく緩やかにするというものである。

当然これを為し遂げるには異常なまでの判断力と反射神経を要求されるものの、最後に大樹のクッションを使えるこの場所ならば、イリヤにとって致命傷を避ける程度はそれほど難しい事ではない。勿論それは——彼が単身ならばの話だが。

「はっ。これくらいで火蜥蜴サラマンダーから逃げられる訳ないだろう。早く逃げないとすぐにやって来るぞ——」

崖下滑降の恐怖からか、そう恨めしそうに言って。

「——って、その血は……!?!」

少女はイリヤの足下に滴っている赤黒い血を指差して、表情を凍らせた。

「……ん?」

先程の無理な駆動で身体の彼方此方が悲鳴を上げているため、どこをどの程度怪我したのか咄嗟に判断する事は出来ないのだが、それでもどうやらかなりの深手を負ったらしいという事は分かった。

「なるほど……」

イリヤがとりわけ焼け付く様な痛みを放っていた箇所――右太腿の裏側に触れると、そこにはまるで鈍い刃物で切ったような深い裂傷が刻まれていて、そこから血が溢れ出していた。

「……途中の岩で切ったか」

イリヤは苦々しく溜め息を吐いた。

崖の突起物による右太腿裏側の裂傷。この少女を担いでいた所為で視界が狭まり、さらに重量が増していたため、無理も無い事だった。元よりその程度の危険は承知で取った行動である。今のところ動作に問題は無いため腱や筋までは届いてなさそうだが――体力、及び脚力の低下は避けられまい。

「私が、居たからか？」

少女はポツリと呟いた。

「なんだ、責任でも感じているのか？」

イリヤは少女の意外な反応に戸惑いながら言った。

「……いや。もしそうだったとしても、そんな逃げ方を選んだお前が悪い」

少女は頭を振って憎まれ口を叩いたが、その口調は明らかに重い。見るからにしょんぼりしている。どうやらイリヤが深手を負った事に対して、自分なりに責任を感じているらしい。それはそれでこの少女の美德を表しているのだろうが、それで共倒れになってしまっ
ては何もかも台無しである。

「まあ、こんな怪我はどうでもいい」

持っていた当て布で傷口を縛り、簡単な止血を終えたイリヤは言った。

「ところで、さっき街が見えただろう？ あれがあんたの目指している街だ。さっきの火蜥蜴サラマンダーは血の匂いに誘われて俺の方に来るはずだから、後は自力で逃げてくれ」

まるで他人様の様にそれだけ言うのと、踵を返して街と反対側の方
向に向かおうとしたイリヤの腕が、いきなり少女の柔らかい手で引

っ張られた。

「……死ぬ気、か？」

少女はまるで化け物を見たかの様な表情を浮かべていた。

「ま、仕方ないだろ。両方死んだら意味が無いからな」

確かに——少女から見たイリヤはあまりにも合理的過ぎて不自然、というよりも明らかに一人の「人」として異常なのだろう。多分。

「怖く、ないのか？」

「……別に全く怖くないって訳でもないんだが、元々惰性で生きていただけだから——」

イリヤは何故か少女の眼を見ていられず、遠くに目を逸らしながら言った。

こういう眼には慣れている。

——『貴方は人間じゃない』。

かつて鍛錬に明け暮れていた自分に、そう言ってきた少女がいた。その時、その少女がしていた眼と全く同じ眼だ。

やはり自分は最期の最期まで、まともな人間になる事が出来なかったらしい。

「正直、どうでもいいってのが本音だな」

イリヤは自嘲気味に笑いながら言った。

「どうでも、いい？」

「ああ。こんな世の中じゃ、な……」

彼女と同じ眼を向けてくる少女を前にして、イリヤは誰に聞かせるという訳でもなく、自然に長年一人で抱え込んできた言葉が次々に溢れ出してくる。

「昔は、押し付けられたものだけど夢があって——」
物心がついた頃。

今や顔も思い出せない実の親に、名前も与えられないまま奴隷として売られた自分。

そんな自分を買取り、「イリヤ」という名前を与えて過酷な修行を強いた里の者達。

そんな彼等に押し付けられた、『戦場で軍功を上げて名誉騎士になる』という幻想。

「ある日、それを叶えられなくなって、何をしたらいいのか分からなくなつて――」

しかし戦争が終わり、そんな幻想は儚く崩れ去つた。

戦争が終わつたと聞かされた日。

お前の人生は無意味で無価値だと。

世界に、そう言われたような気がした。

「そんな俺を導いてくれた人まで失つて――」

修行の最中、『貴方は人間じゃない』と言つてきた、山深くにひっそりと存在する里に年に数回訪れる、隊商の一族に生まれたという少女。

彼女は自分を人間に戻すんだと言つて、戦う事しか知らない自分に色々な事を教えてくれた。今の自分が曲がりなりにも人間らしく振る舞えるのは全て彼女のお蔭だ。

だから誓つた。

自分の人生は、彼女の為に捧げようと。たとえそれが報われなかったとしても、自分がそう誓つた事は無意味ではないと。そう思つた。

しかし彼女は一年前、何者かの手によって殺されてしまった。

所詮自分の力なんて世界の不条理と比べてあまりに無力で――無意味だった。

そう、思い知らされた。

「俺の、俺の大事なものは全部無くなつてしまった」

そして周囲を見渡した時、自分に残っていたものは無かった。

ただ、いつも少女の後ろで人ならざる自分に脅えていた彼女の妹だけが、近くに立っていた。

しかし彼女は、決して彼女の代替にはならない。

少なくとも、自分と目の前に立っている少女の両方が間違ひなく殺されるという愚行を冒してまで、彼女の下に戻ろうとは思えない

のだ。

「だから、もういいんだよ。もう。どうでもな」

「……さっき言っていた『五月蠅い奴』はどうするんだ？」

「あんたが、無事に街まで辿り着けたら、その難民街の東地区にドミニカっていう栗毛の女の子が住んでいるから、お前の兄は死んだって伝えておいてくれ」

実際、そんな事はどうでもいいのだ。どうして俺が、どうして俺なんかが、自分の死んだ後の事まで考えなければいけないのだ。俺は、俺は早く死んで彼女に――

「――馬鹿が」

会いたいんだ、と思わず叫びそうになったイリヤを、少女が凜とした声で制した。

「自分の大事な人が死んだからどうでもいい、だと？ 泣き言を言うな。そいつがお前のこんな、こんな馬鹿みたいな死に方を望んでいると思うのか？」

「……………」

これ以上ない程の正論だ。

だが、それは所詮綺麗事に過ぎない。この俺でさえ万に一つも敵わない火蜥蜴サラマンダーを相手にして、たかがお前如きに何が出来るというのだ――？

そう反論しようとしたイリヤの行動は、またも意外な少女の言動で中断された。

「仕方ない。この私がお前に、少しはマシな死に方を与えてやる」
そう言う少女は、背中の大リュックを下ろしてそこから大小様々な機械類を取り出すと、それらを地面に置いた鋼の杖に取り付け始めた。

「……それは？」

いまさらのように、イリヤはそう訊ねた。

少女が突如始めた謎の行動に、そうさせるだけの雰囲気があったからだ。

「この私が開発した、携帯型魔導具『魔杖』だ。これを上手く使えば、あの火蜥蜴を返り討ちに出来るかもしれないぞ？」

少女は不敵に笑った。

魔導具。

それは魔法士が魔法を発動する際に用いる道具の名前だ。騎士にとっての剣や槍、射手においての弓矢に該当する、いわば魔法士としての証である。

本来は馬車や砲台に取り付けて使用する大型の兵器であり、今までこのようなサイズの魔導器があるという話は聞いた事がなかったが、少女がこのような状況下で言っている以上、わざわざそれを疑う理由は無いだろう。

「あんた、魔法士だったのか。確かに魔法なら、いや、しかし……」
イリヤは言葉を濁らせた。

彼は魔法士ではない為、細かい理論については分からない。しかし、魔法士の用いる異能の力に関しては何度も耳にした事があった。魔法は魔導具自体の非携帯性と、それを行使する際に必要な手順の煩雑性から、近接戦闘を行いながら使用する事は出来ない。実際、この場で誰かに少女が魔法を発動させる前に殺せと命令されれば、イリヤは少女を何度殺せるかも分からない。

しかし、一度発動した魔法の力は他の武器の追隨を許さない。

魔法の種類にも依るものの、その射程距離は弓矢の類を遙かに超え——卓越した魔法士に十分な時間と手間を与えれば、単身で一つの戦況を変えられるとまで言われている。ちなみに、数年前に滅亡したセント帝国は特に強力な魔法士部隊を擁していた事で有名で、かの国がほぼ世界全土の国を敵に回しても滅亡寸前まで互角に戦う事が出来たのは、その魔法士部隊のお蔭だという話である。

だが、あいにくここは樹海である。視界はほとんど利かず、正確に狙いを定める為には火蜥蜴のすぐ近くで発動準備をする必要があるのだ。

「ふむ。確かにお前の言う通り、魔法の発動にはそれなりの準備と

接近が必要……」

そこまで言ったところで。

二人は互いに顔を見合わせ、崖の反対側を向いた。
すると。

「……………」

「……接近する必要は無くなったな」

少女は口を閉じ。

イリヤは溜め息を吐いた。

その直後、赤黒い巨大な蜥蜴——サラマンダー火蜥蜴が大樹の陰から姿を現した。

不運はそれだけではない。

サラマンダー火蜥蜴の頭部に生えている角のような突起物に光が点った。

続けてサラマンダー火蜥蜴が大きく咆哮すると、その光は無数に分裂してそのまま消える事無く滞留し、そのどころか続けて放たれる無数の咆哮に呼応して四方八方に伸長——合体し、複雑な紋様を描き始めた。

それはいわゆる——魔法陣だ。

魔獣。

それは魔法を用いる生物の総称である。

人間は基本的に何らかの魔導具を用いなければ魔法を使えないが、魔獣はその身体一つで魔法を行使する事が出来る。何故なら魔獣は、それぞれ『魔導器官』と呼ばれる魔法を発動する際に必要な発動媒体と、その媒体を処理する特殊な器官を備えているからだ。たとえばこのサラマンダー火蜥蜴の場合は、額に生えた角のような突起物がそれに相当している。

「——私が攻撃する。だからお前は、それまで奴を食い止めろ」

少女はきっぱりと言った。

「……………」

どうやって少女を逃がすか。それしか考えていなかったイリヤは絶句した。

「このままではお前は、くだらない泣き言に付き合わせて私を逃が

し損ねた最低の人間だぞ。その責任を取って、死んでも奴を食い止める。いいな？」

無茶ぶりも甚だしい。事実上の死刑勧告だ。

だが——このままあっさり殺されてしまうよりも、万が一の可能性に賭けて死力を尽くした方が、彼女は笑ってくれるような気がした。

「……分かった。やれるだけやってみよう」

腹を括ったイリヤは一步前に足を進めた。

「ああ。任せたぞ」

少女がそう言って後ろに下がったのを確認すると、イリヤは大きく息を吸った。

手持ちの武器は、山菜の採集や小動物を狩るために使う小振りな獵刀一本だ。大型魔獸、それも火蜥蜴サラマンダーを相手にする以上、せめて長剣、出来れば大剣の類が欲しいところなのだが、無いものねだりをして仕方あるまい。

使えるものは何であれ、使うしかないだろう。

それがたとえ非力な獵刀であろうと——禁忌の業であろうとも。

「——『我は？忍？』」

イリヤはそつと呟いた。

「何……？」

イリヤと火蜥蜴サラマンダーの戦闘に巻き込まれない為、彼から少し距離を取り始めた少女は背後を振り返って訝しげに声を上げたが、彼は何の反応も示さなかった。何故なら極度の精神集中に入った彼は、少女の声自体は耳に届いていたものの、それを意識する事が出来なかったからだ。

「『我？忍？故に陽を遁れ』——『？忍？故に陰に隠る』」

そう唱えた直後、彼の身体の輪郭がまるで深い霧が掛かった様にみるみる澱み、薄れ、霞んでいき、周囲の風景に溶け込み始めた。

『あの日』以来、これを使うのはイリヤにとって約一年ぶりであった為、正直一字一句正確に覚えているかどうかは自信が無かった

のだが、いざ唱えてみれば、殆ど無意識のままに正しい言葉が溢れ出してくる。流石に何千、何万回と繰り返し唱えて身体中に刻み付けた言葉——たかが一年程度の怠慢では薄れないようだ。

それはつまり、自分がこの一年間で何も変わっていないという事実を如実に表していて——それはそれで哀しい事でもあったが、今この瞬間に於いては確かに僥倖じやうひんであった。

「『故に我、一切の栄光を受ける事無く』——」

続けて黒い靄かげのようなものが彼を包み込み、彼の姿をさらに捉え難いものへと変えた。

その捉え難さは、彼と火蜥蜴サラマンダーの様子を伺いながら支援攻撃の為の最適な距離を計っていた少女に、彼の居場所をあらかじめ知っていなければ容易に発見する事は出来ないだろうと思わせる程のものであった。

彼にとって、これは一種の『鎖』だ。

普段は封じ込められ、隠されている本当の自分を表に現出させる為の。そして一節、また一節と紡ぐ度に、彼は自分の本質とでも言うべきものが身体の内側から溢れ出してくるのを感じていた。

「『唯ただその身を、一振りの刃と化す』」

眠っていた筋肉が目覚め、心臓は早鐘を打ち始める。

そして最後に彼の神経が、彼の体感速度を通常時の半分以上に感じさせる程の異常な感度で駆動し始めた。

「……は————」

イリヤは静かに、熱い吐息を吐き出した。

全身を黒く霞ませた彼の身体で、唯一その鋭い双眸だけが、身体中で活性化した魔力の影響を受けて、暗闇に潜む獣の瞳の様に紅く光り始めた。

今の彼は——彼本来の武芸を限界以上に発揮するだけの「兵器」だ。

勿論それは、単に通常時と比べて臂力や反射神経が優れているという意味ではない。

簡単に表現するなら、今の彼は全身の筋肉は勿論、それを動かす神経、さらにはそれらを司る頭脳までもが戦闘の為だけに最適化されている。

いわば戦う為に身体を動かし、戦う為に思考するだけの存在へと変化したのである。

それは最早人ではない。

人の形と機能を備えた一種の兵器と言った方が正確だ。

しかし——そのままの姿では、彼は人として生きていく事が出来ない。

何故なら人間は何の意味も無く、他の様々な動物と違って戦闘に最適化されていない脆弱な肉体を手に入れた訳ではないからだ。

たとえば戦闘に最適化した故の弊害として真っ先に挙げられるのが、抽象的思考能力などの直接戦闘には関係無いものの、人間を人間足らしめているような能力において、どんな凡人にも及ばない未熟な者になってしまいう事である。

人の姿をした獣の如き自動兵器。これを良からぬ者に悪用されるような事があってはならない。所詮兵器とはいえ、人の姿をして人間社会に生きる以上、普段は人として最低限の道理や道徳を解する心を持つ必要があるからだ。

故に求められた。

人と兵器の間を自在に行き来する方法が。

遠い昔、それを欲した者達が居た。

そしてその者達はその答えを、当時まだ近代魔法学として体系化されていなかった未知の力の中に見出だし、長い年月に渡る実験と研究を積み重ね、最初は単なる暗示のようなものに過ぎなかった力を徐々に現実的なものへと昇華させていき——やがてその技術を伝承する集団が各地で現れるようになった。

その一つ——奥義〈無影無双〉^{むえいむそう}。

一時的に俊敏性を中心とした身体能力の向上、及び固有の隠密能力を獲得する、極東の山間部に集落を構える小さな部族〈晴嵐衆^{アルゴル}〉

の編み出した秘伝の業である。

「これは、まさか？極東の黒霞くろかすみ？……？」

少女は思わず驚嘆の声を上げて〈晴嵐衆アルコル〉の異名を呟いた。

しかしそれも無理はない。何故なら使い手がこれを人前で使うのは、互いに殺すか殺されるか以外の選択肢を失った極限状態の時だけであり、たとえ戦場といえども滅多に見られるものではないからだ。

そして。

サラマンダー
火蜥蜴の呪文詠唱が終わった。

空中に浮かぶ魔法陣は高速で回転しながらギラギラと光を放っている。

先程放っていた炎弾が四つ、その魔法陣の前後左右に浮いて赤々と燃えている。

流石に森の王者——目の前でこれだけの変化を見せられながら、全く動じていない。

「では——始めるか」

イリヤは僅かに身体を沈めながら言った。

サラマンダー
火蜥蜴の魔法陣が、さらに強く光を放った。

次の瞬間。

炎弾の一つが、イリヤに向かって放たれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5744z/>

魔女と忍者と旅商人

2011年12月24日02時52分発行